

朝鮮語と日本語の連体修飾節 (冠形節) 構造

野間 秀樹

1. はじめに
2. いくつかの前提
3. 連体節と文法範疇
4. 連体節の認定
5. 連体節内部の構造
6. おわりに

1. はじめに

本稿の目的は、現代朝鮮語の連体修飾節(冠形節)の構造上のいくつかの特徴を、日本語に照らしあわせながら明らかにすることにある。韓国では連体修飾節を一般に「관형절(冠形節)」と呼ぶことが多い。本稿ではこれを「連体節」と呼ぶことにする。

本稿では、1980年代以降に韓国で出版された、小説、戯曲、手記、放送スクリプトなどを調査し、それらを基本資料として用いた¹。文の総数は1,3889例である。計量的な作業は全てこの基本資料に基づくものとするが、基本資料以外からも用例を引用する場合がある。全ての引用資料一覧は末尾に付す。引用の例文は、〈出典略号/ページ〉の形式で、例文末尾に出典を示す。出典のない用例は作例である。作例については複数の母語話者²の検討を仰いだ。母語話者が当該の作例を自然な文であると認定した場合は「○」、若干不自然であると認定した場合は「△」、全く不自然であると認定した場合は「×」を、それぞれ例文末尾に付す。

特別な言及がない限り、朝鮮語の「文」や「節」など、文の構造に関する術語は野間秀樹(1995,1997)および노마(野間秀樹)(1996a)に拠るものとし、その他の基本的な文法用語は菅野裕臣(1981)に拠る。

2. いくつかの前提

議論の出発にあたって、いくつかの前提となる事項を確認しよう。朝鮮語の文(sentence)は、述語が統合(integrate)する³述語文(predicate sentence)と、述語によって統合されていない非述語文(non-predicate sentence)とに分けることができる。述語となるためには、基本的に用言が必要である。つまり述語となるのは、(1)動詞、(2)形容詞、(3)存在詞、(4)体言に指定詞を伴ったもの、以上の4種である⁴。

述語文の核は述語(predicate)であり、主語(subject)は必要な場合にのみ現れる要素であつて、必須のものではない。主語のない文は、主語が「省略」されたものだとして決め付けるのも、もちろん早計であつて、むしろもともと必要がないゆえに、主語が現れないのだと見るべきであろう。述語のあるところ〈主語＋述語〉の構造を必須のものとする、英語やドイツ語などと、朝鮮語や日本語はこうした点で決定的に異なることを、まず第一に確認しなければならない⁵。朝鮮語と日本語の主語のあり方の詳細な違いについては、未だよくわかっていないけれども、大枠については朝鮮語と日本語はよく似ていると考えてよい。

文の認定に主語の有無を条件にできない以上、節(clause)の認定にも、主語の有無を条件とするわけにはゆかない。述語と認定しうる要素がある時、その述語で統合されている部分は、全て1つの節と考えるのが、理に適っている。ただし、ここでも文と同様、朝鮮語における節もまた、英語やドイツ語における節とは、はなはだ隔たっていることに留意せねばならない。節の認定についても朝鮮語と日本語はその大枠については似ている⁶。

朝鮮語では一般に、節の末尾は形態論的に明確である。主節を並列しただけの並列統語(parataxis)における並列節の場合は用言の終止形が⁷、従属統語(hypotaxis)⁷による並列節の場合は用言の接続形（副動詞形）が⁸、従属節のうち連用節（副詞節）は用言の接続形（副動詞形）が⁸、連体節の場合は用言の連体形（冠形詞形）が⁸、単一節の名詞節の場合は用言の名詞形が⁸、それぞれ節の末尾に立ち、節を統合しており、それぞれの述語が節の末尾のマーカーとなっている⁸。「私が買った本」と「この本は私が買った。」のように、日本語では、用言の連体形と終止形が同じ形になり、形だけで判別できない場合があるのに対し、朝鮮語では、「내가 산 책」と「이 책은 내가 샀다。」のように用言の連体形と終止形は常に異なる形なので、この点で節の末尾は形態論的には日本語以上に明確だといえる。節の頭は朝鮮語も日本語も関係代名詞のような明示的なマーカーがあるわけではなく、形態論的には決定できないことがほとんどである。

節らしさという点では、朝鮮語の種々の従属節は、その意味や機能によって様々な段階がある。動作の様態を表わす節、即ち〈様態節〉は、その内部に主語はおろか場所の状況語や、전혀(全然)などの、否定と呼応する副詞⁹を多くは内部に持ち得ず、また種々の法(mood)や時制(tense)の対立もない、最も節らしからぬ節である。〈様態節〉は純然たる節というよりは、むしろ擬似節(pseudoclass)というべきものである。ただし同じ〈様態節〉の中でも〈하다가節〉（していて節）は〈하면서節〉¹⁰（しながら節）より大きく、節の内部に否定と呼応する副詞を包摂できるし、〈하면서節〉（しながら節）を内包することもできる。〈条件節〉の〈하면節〉（すれば節）は、〈様態節〉よりは大きく、内部に時間や場所の状況語、主語も内包できる。更に〈理由節〉、〈譲歩節〉、〈反意節〉の順で、節は内部に、より多様な要素を内包できるようになる。このように従属節は内部にどのような要素を含みうるか、従属節同士の包含関係はどうか、という点から見て互いに階層構造をなしている。そしてそうした階層構造は、命題(proposition)と法性(modality)¹¹、もしくは、dictum と modus¹²の構造の中に組み込まれているといえる¹³。

従属節の階層構造については日本語では南不二男(1974,1991,1993)が先駆的な業績である。また仁田義雄(1989,1993)や野田尚史(1995)は階層構造についての研究を更に推し進めている。

3. 連体節と文法範疇

3-1. 連体節の非自立性

上述のように、連体節（冠形節）は用言の連体形をもって統合され、体言を修飾する節である。連体節はそれ自体で完結する節ではなく、被修飾体言を必須の後続要素として要求する点で、節としての独立性は連用節（副詞節）や名詞節など他の従属節よりも独立性が弱い。連体節だけでは一般には用いられず、〈連体節＋被修飾体言〉という構造になって始めて独立した節として自立できるのである。この点は朝鮮語も日本語も同様である。

3-2. 連体形語尾と連体形の文法範疇

朝鮮語の連体形語尾の認定には、形態論的な平面においても、いくつかの議論があつて、学界でも統一された見解には至っていない¹⁴。ここでは一次的な形として、-는, -ㄴ, -ㄴ, -던を認め、二次的な複合形として、いわゆる過去接尾辞が前接した、-ㅁ을と-ㅁ던を認めることにする。更に過去接尾辞が重なった三次的な複合形として、-ㅁ였을と-ㅁ있던があるが、これらは極めて稀にしか用いられない。以上を、それぞれ用言하다と結合した形では、하는, 한, 할, 하던, 했을, 했던, 했을, 했었던と表わしうる。

こうした諸形は基本的にそれぞれ相補的な分布を示すにもかかわらず、文法範疇の観点からは、厳密な意味で単純な時制(tense)¹⁵の対立とも言えず、タクシス(taxis)¹⁶の対立とも言えないし、純粋な法(mood)の対立とも言えない。またアスペクト(aspect)¹⁷の対立であると見ることもできない。結局のところ、それら諸機能が混交した機能の対立であると見るのが穏当なところであろう。既存の文法論で議論された文法範疇が、朝鮮語において純粋な形で実現されていなければならない、何らの必然性もないのであつて、諸機能のこうした混交を、無理に1つの文法範疇に押し込める必要もないだろう。ただし、それぞれの形が全て上の諸機能の均一な混交というわけではなく、하는や한のように非常に時制的な色彩の濃い形があり、할と하던のように法的な色彩の濃い形があることに留意したい。法的な色彩の濃い할と하던にのみ、いわゆる過去接尾辞が付いた、했을と했던という複合形があることも注目すべきである。

「現在形」の名で呼ばれる하는は、動詞と存在詞にのみ用いられ、ある設定された時に、そういう状態にある、既にそういうことになっているということを表わすことが多く、時制的な性格が濃い。形容詞や指定詞という、時間的な性格の希薄な語類に用いられないということ自体が、この形の時間的な性格の濃さを物語っている。하는は、目の前で起こっている事実であれ、習慣や反復的な動作であれ、これから先に起こることであれ、どれをとつても、いわば「既然」的な性格が濃い形である。

「過去形」と呼ばれる^한は、終止形の-았/었-, つまり, 했^다形と平行するもののよう論じられることが多い。しかし終止形においては〈하고 있었다〉というアスペクト形式との承接が多用されるのに対し、連体形においては〈하고 있는〉という承接が極めて稀である点で、両者は著しい差を見せていることに注目したい。実は^한自体がそもそも相当に「完了」や「結果」とでもいうべきアスペクト的性格が濃いために「進行」や「持続」的な〈하고 있다〉とは承接に齟齬をきたすのかもしれない。動詞に付くと過去のことから、形容詞に付くと現在のことから言うわけだが、いずれも既にそうってしまったということ表わすと考えれば、1つに括って考えることもできないわけではない。良い名称ではないが、一括して考える場合は、「既にそうってしまった」という点で「完成」を表わすものとしておこう。

しばしば「未来形」と呼ばれる^할は、推量や蓋然、当為的なニュアンスを帯びることがしばしばで、法的な色彩が濃いが、時間的な観点から見ると、ある設定された時よりも前のことには用いないという特徴を持つ。この点では時制的である。時間的には過去ではなく、少なくとも設定された時以降のことからを表わす。空間的な観点まで入れて考えても、基本的には非現場的なことから表わすのに用いるわけである。この点では終止形の〈할 것이다〉と似ている。全体の用法を一括する良い名称はないが、「予期」的な契機を多かれ少なかれ内包するという点に鑑みて、^할は「予期」と呼んでおこう。

^{하던}は体験法接尾辞-더⁻¹⁸に由来するものの、体験法的な色彩は終止形（終結形）^{하더라}に比べるとはるかに薄い。時間的には、^{하던}はある設定された時よりも前のことにのみ用いるという点では時制的である。終止形^{하더라}との差を考慮して「体験」の名は避けることにして、とりあえず「経験」とでも呼んでおこう。

前述のように、これら諸形の対立は、法、時制、タクシス、アスペクトのうち、純粹にどの文法範疇に属するとは言えないが、推量や蓋然的な意味に重きを置かなければ、これら諸形の対立を時制の対立であると見てもあながち間違いとは言えない。これらの諸形について、ここでは次のように一応の名づけを与えておこう：

- ^{하는}：既然形（動詞と存在詞にのみ存在する）
- ^한：完成形（動詞では結果的な過去、形容詞では現在の状態）
- ^할：予期形， ^{했을}：過去推量形， ^{했었을}：大過去推量形
- ^{하던}：経験形， ^{했던}：過去経験形， ^{했었던}：大過去経験形

連体形の「時」は、時制的な観点からのみ見ると、主節の「時」を基準とするいわゆる相対時制でも、発話時を基準とする絶対時制でもなく、主節からも発話時からも独立した設定時を持つ時制だといえる。ここではそうした時制を独立時制(independent tense)と呼ぶことにする。独立時制は、主節の時や発話時から浮いている時制(floating tense)である。朝鮮語の連体節の時は、条

件によつては主節の「時」に呼応するように働き、あるいはまた発話時に呼応するように働くように見えるが¹⁹、常に主節時と発話時どちらかの「時」に支配されているというわけではないという点で、基本的には独立していると見るべきだろう。連体節の「時」は、主節時や発話時から浮いている「時」(floating time)なのである。

4. 連体節の認定

4-1. 2種類の連体節

朝鮮語の連体節と被修飾体言との係わり方には、2種類があることが知られている。下の用例を日本語に訳してもわかるとおり、やはり日本語にも平行して2種類がある：

- (a) 누나가 싸주는 도시락도 싫었다. <첫사랑/205>

姉さんが作ってくれる弁当も嫌だった。

- (b) 네가 아이들에게 존경을 받는 이유를 나는 몰랐다. <첫사랑/206>

お前が皆に尊敬される理由が僕には分からなかった。

李翊燮・任洪彬(1983:270)によれば、(a)は関係化(relativization)、(b)は名詞句補文化(NP-complementation)とされている²⁰。両者は、連体節の被修飾名詞即ち head noun が連体節内部の一成分になるかどうかで区別される。(b)の連体節は内容節(content clause)あるいは同格節(appositive clause)と呼ばれる。

日本語文法では早くからこの2種の構造に着目したいくつかの論考がある。奥津敬一郎(1974:182)は「被修飾名詞が連体修飾文中には現れず、いわばその外から新たに付加される」構造に現れる被修飾名詞を「付加連体名詞」あるいは「付加名詞」と呼び、この種の構造を「付加名詞連体修飾」もしくは「付加連体修飾」と呼んだ。井上和子(1976:191)は日本語におけるこの種の内容節を「擬似関係節」と呼んでいる。寺村秀夫(1980:1993)は「サンマを焼く男」のように「男がサンマを焼く」の形にもどせるものを「内の関係」、このような形にもどせない「サンマを焼く匂い」の型を「外の関係」と呼び、前者を付加的修飾、後者を内容補充的修飾であるとした。また柴谷方良他(1982:366-367)にも参考になる議論がある。

(b)の型で被修飾名詞に立ちうるものは、朝鮮語も日本語と概ね似ている。主として引用にからむ名詞や一群の抽象的な名詞である。井上和子(1976)は日本語における「擬似関係節」の被修飾語には、(1)「時」「ところ」「理由」「方法」およびこれに準ずる名詞句、(2)「そば」「むこう」「上」「下」などの関係を表す名詞句、(3)「におい」「音」「有様」など感覚に訴える物事を表す名詞句があるとしている。

また、益岡隆志・田窪行則(1992:204)によれば、日本語では、(b)の型では「救助されたという／との報告」のように「という」と「との」を伴うものがある²¹。この点、朝鮮語では「との」のよ

うな属格語尾を有する形は用いられないことが特徴的である。こうした場合、朝鮮語では、引用節の末尾に連体形語尾を用いた、「という」に相当する -다는/-라는が用いられるだけである：

- 니가 있다는 것이 나를 존재하게 해. 니가 있어 나는 살 수 있는 거야. 〈존재〉
おまえがいるということが俺を存在せしめるんだ。おまえがいて俺が生きていられるんだ。

なお、上の2つの場合の連体節内部の構造の差異については更なる調査が必要であろう。

4-2. 単独の形容詞の連体節

連体節の場合は、単独の形容詞の連体形を節と認定するかどうか問題になってくる²²。しかし前述のように、節の認定に述語の有無のみを条件とするならば、単独の形容詞の連体形も述語であり、ゆえに節の一種と見なければならぬ。更にまた次のように、形容詞の連体形に前述の時制(tense)もしくは法(mood)、あるいはそれら混交の対立が存在していることも、単独の形容詞の連体形を述語と認定し、節と認定する強力な条件となる。

- [아름다운] 꿈. (美しい夢) (連体節かつ連体修飾語)
- [아름다웠던] 꿈. (美しかった夢) (連体節かつ連体修飾語)
- [아름다웠을] 꿈. (美しかったであろう夢) (連体節かつ連体修飾語)
- 사람의 꿈. (人の夢) (節にあらず。連体修飾語)

おなじ連体修飾語でも、述語でない連体修飾語を持つ構造、つまり「통곡의 세월」(慟哭の歳月)のような、属格語尾(助詞)を持つ構造や、「모든 사람들」(全ての人々)のような、連体詞(冠形詞)を持つ構造には、当然のことながら、時制や法の対立は存在しないのである。

形容詞単独の連体形が2つ以上並列される場合には、朝鮮語では次のように-고などの接続形語尾が現れることも、単独の形容詞連体形が述語であり、節を形成するものであることを裏付ける：

- 길고 가는 몸이 있었고 납작하고 포동포동한 몸이 있었다. 〈첫사랑/207〉
長くて細い体があつたし、平たくてぼちやぼちやした体があつた。

形容詞単独の連体形も連体節である傍証として、直前に原因・理由節のような連用節まで従えることができることをあげてよいかもしれない。形容詞や動詞の連体形と違って、他の一般的な連体修飾語は、原因・理由節のような連用節に従えにくいのではないと思われるからである：

- (略) [[크림을 발라] 반질반질한] 얼굴을 (略) <바구니/53>

[[クリームを塗って] すべすべした] 顔を

なお、形容詞単独の連体形は、直前に連用節のみならずもちろん格や他の要素を従えうる：

- (略) [[유난히 무더운] 날씨에도 아랑곳없이 아침부터 음식 장만에 바쁘신] 새엄마 (略) <바구니/60>

とりわけ蒸し暑い天気ものともせず、朝からご馳走作りに忙しい新しいお母さん

4-3. 指定詞の連体節

指定詞-이다 (…である) で統合される連体節にも種々の問題がある。文を認定する場合と同様に、指定詞がないと述語としての統合力に欠け、節としての構造を維持できない：

- 달준씨 부인 맹 여사가 요즘 고민에 빠졌다. <인간/13> (単語結合)

タルチュンさんの夫人孟女史が近ごろ悩みに陥っている。(単語結合)

上の下線部は朝鮮語も日本語も単なる単語結合(連語)(slovosochetanie)²³でしかなく、節とは言えない。

朝鮮語では指定詞-이다, 日本語では「…である」を用いた構造は、時制もしくは法の対立も備えており、連体節と考えてよからう：

- [달준씨 부인인] 맹 여사. (連体節)

[タルチュンさんの夫人である] 孟女史. (連体節)

- [달준씨 부인이있던] 맹 여사. (連体節)

[タルチュンさんの夫人であつた] 孟女史. (連体節)

- [달준씨 부인이었을] 맹 여사. (連体節)

[タルチュンさんの夫人であつただろう] 孟女史. (連体節)

5. 連体節内部の構造

5-1. 連体節の主語-가/-이 (…が) と-는/-은 (…は) の制約

連体節においては、動作や状態の主体を表す主語²⁴の語尾(助詞)として、一般に-가/-이 (…が)のみが用いられ、-는/-은 (…は)は避けられる。このことについては朝鮮語と日本語は概ね並行的である：

- [바다가 불러주는] 자장노래에 팔 베고 스프르르 잠이 듭니다. <한인현/섬집 아기> ○○

[海が歌ってくれる] 子守り歌に、腕を枕にすうっと寝入ります。○

- [바다는 불러 주는] 자장노래에 팔 베고 스프르르 잠이 듭니다. <한인현/섬집 아기改変>

× ×

[海は歌ってくれる] 子守り歌に、腕を枕にすうっと寝入ります。×

- 어느덧 [우리가 간] 곳은 여의도광장이었습니다. <바구니/54> ○○

いつしか [私たちが行った] 所はヨイド広場でした。○

- 어느덧 [우리는 간] 곳은 여의도광장이었습니다. <바구니/54改変> × ×

いつしか [私たちは行った] 所はヨイド広場でした。×

上の事実は、-는/-은を伴う要素は連体節におさまりにくいということを意味している。更に -는/-은を伴う要素が主題を表わす題目語(主題語)であるならば、題目語は連体節におさまりにくいということでもある：

- 저는(主題)[다음 달에 전역을 앞둔] 예비 사회인입니다. <바구니/56>

私は(主題)[来月兵役を前にした] 予備社会人なのです。

- 지금은(主題)[꽃 피고 새 우는] 5월. <군것질/21>

今は(主題)[花咲き、鳥歌う] 5月。

-가/-이 (…が) 及び -는/-은 (…は) と、連体節の関係を図式化すると次のようになろう：

- [-는/-은 [-가/-이 連体節] 主節]

- [題目語 [-가/-이 連体節] 主節]

一般に「述べ＝述べられ」という発話の伝達論的な働きを考えるなら、-는/-은によつて、それについて何事かが述べられるべき主題(theme)が文において提示されると、その主題を受けて述べ、解決をもたらす叙述(rheme)が後ろに現れる。文の階層構造の観点から見ると、こうした発話の伝達論的な平面における「主題＝叙述」を貫く階層が存在していると見ることができ。つまり叙述を担当する要素が現れるまで、「主題＝叙述」の緊張関係は維持されているのである。-는/-은を伴う要素は、こうした「主題＝叙述」の階層に入るマーカーとして働いている。文の一定の階層に入る役割を表示する要素をIN-marker、一定の階層から抜け出る役割を果たす要素をOUT-markerと呼ぶならば²⁵、-는/-은 (…は) は主題の階層に入る IN-marker としては働くが、連体節の述語を形成する、用言の連体形は、主題の階層から抜け出る OUT-marker とし

ては機能しないのだとすることができる。言い換えれば、-는/-은によつて一度「主題＝叙述」の階層に入ると、用言の連体形をもつては、まだその階層から抜け出すことはできないのである。題目語が連体節に包摂されえないというのは、以上のようなことを意味している：

- 그것은(主題)▲(IN-marker) [내가 처음으로 맛본×(非 OUT-marker)] 배신이었다▼(OUT-marker). <슬레 /211>

それは「僕が初めて味わった」背信であつた。

- 그들은(主題)▲(IN-marker) [근처에 있는×(非 OUT-marker)] 절로 올라갔다▼(OUT-marker). <군것질 /37>

彼らは「近所にある」寺へ登つた。²⁶

- 여자는(主題)▲(IN-marker) 처음으로 [공공단체의 간사로 앉아 있는×(非 OUT-marker)] 자신이 싫었다▼(OUT-marker). <군것질 /39>

女は初めて「公共団体の幹事としておさまっている」自分が嫌だつた。

なお、-는/-은 (…は) で主題が示される場合のみならず、次のように、-가/-이 (…が) が、「他のものではなく、まさにそれが³」という、排他的意味で用いられる場合にも、-가/-이を持つその要素は連体節に内包されない。次の例では、-가/-이を持つ要素が³(a)と(b)の2度重なつて出ることによつて、先行する(a)が排他的意味であることが³、より鮮明に表わされている。いうまでもなく、(a)と(b)の位置を取り替えることはできない：

- 그것이(a)[누나와 내가(b) 아버지로부터 처음 얻어낸] 사랑이었던 것이다.<슬레/223>

それが³(a)[姉さんと僕が(b)父さんから初めてもらつた]愛だつたのだ。

-는/-은 (…は) で示される主題は連体節に内包されないという、これまで述べたような原則にもかかわらず、-는/-은 (…は) は、対比や対照を表す場合に限つて、連体節内で働くことができるようになる。これは日本語とある程度までは共通する制約であると思われる：

- [영수가 읽는] 책을 왜 너는 못 읽어? ○○

[ヨンスが読む] 本をなんでお前は読めないんだ? ○

- [영수는 읽는] 책을 왜 너는 못 읽어? ○△

[ヨンスは読む] 本をなんでお前は読めないんだ? ○ (対比)

対比や対照を表わしさえすれば、後続の要素に対比や対照を表わす要素がことさら明示されなくとももちろん構わない：

- 이것은 [영수는 읽는] 책이야. ○○ (対比)

(≒다른 사람은 읽지 못할 것이다.)

これは [ヨンスは読む] 本なんだ. ○ (対比)

(≒別の人は読めないだろう.)

このように見る時、即断は避けねばならないが、少なくとも連体節との関わりにおいては、朝鮮語の-는/-은 (…は) も、日本語の「…は」も、一般に主題を表わす機能を持つ場合と、対比や対照を表わす機能を持つ場合とでは、明らかに統辞論的な性格が異なると言える。つまり朝鮮語の-는/-은 (…は) も、日本語の「…は」も、少なくとも、主題を表わすものと、対比・対照をあらわすものの、2つのグループが存在すると見るのできるのである。上の例をもう一度観察するなら、最初に現れるものは主題を表わすものであり、後者は対比・対照を表わすものとみなすことができよう：

- 이것은(主題) [영수는(対比) 읽는] 책이야. ○○

これは(主題) [ヨンスは(対比)読む] 本なんだ. ○

ただし、朝鮮語と日本語を比べると、日本語の方が制約がきついようである。日本語の「…は」の方が朝鮮語の-는/-은 (…は) よりも主題の層に入る IN-marker としての働きが強いのかも知れない：

- [영수가 만난] 학생을 난 만나지 않았다. ○

[ヨンスが会った] 学生に僕は会わなかった. ○

- [영수는 만난] 학생을 난 만나지 않았다. ○△ (対比)

[ヨンスは会った] 学生に僕は会わなかった. ○△ (対比)

- [영수가 해낸] 일을 난 해내지 못했다. ○○

[ヨンスがやりとげた] ことを僕はやりとげられなかった. ○

- [영수는 해낸] 일을 난 해내지 못했다. ○△ (対比)

[ヨンスはやりとげたこと] を僕はやりとげられなかった. ○△ (対比)

更にまた、連体節が拡大節²⁷をなし、〈하는 것이다〉(するのだ)、〈할 것이다〉(するだろう)、〈할 것 같다〉(しそうだ)等々、分析的なmood語形として文法化(grammaticalization)するに至ったものは、-가/-이はもちろん、-는/-은を持つ要素も自由に用いることができる。このことで

もわかるように、これらの語形は連体節であることを離れて、既にどこまでも1つの述語として機能しているのである：

- 난 그만들 거야. <군것질 /26> 俺はやめるぞ.

このことは、逆に、-는/-은を持つ要素が自由に来うるかどうか³、当該の語形がmood語形化しているかどうかの判別基準の1つになりうることを示唆してくれている。次の例では、3つの連体形のうち、×印で示した最初の2つは、▲印で示した、-는/-은を持つ要素に対するOUT-markerの機能を果たしておらず、▼印の最後のものだけが、<옛보고 있었던 것이다>全体で-는/-은を持つ要素に対するOUT-markerの役割を果たしており、<했던 것이다>という形がmood語形として文法化していることがわかる：

- 그녀의 무표정한 얼굴에서 나는▲(IN-marker) [9개월 전 암 선고를 받은×] 뒤 [외숙모의 얼굴에 드리워져 있던×] 차디찬 죽음의 그림자를 옛보고 있었던 것이다▼(OUT-marker). <천지간 /27>

彼女の無表情な顔から、私は、[9ヶ月前、癌宣告を受けた] 後、[おばの顔に垂らされていた] 冷たい死の影を覗き見ていたのだ。

5-2. 連体節と副詞, 副詞類

前述のように、従属節はその種類と機能に応じて、自己の内部にどのような要素を内包しうるかが概ね決まっている。前節では主語と題目語の問題を見たので、ここではいくつかのタイプの副詞や副詞類が連体節の内部に包摂されうるかを検討してみよう。

従属節のうち、様態節は場所の状況語を内包しえないが³、連体節は場所の状況語を内包しうる：

- [문간에서 옆집 마누라와 무슨 얘긴가를 하고 있던] 예펜네가 남편을 보자 그 얼굴빛에 기겁을 해서 안으로 따라 들어왔다. <군것질 /25>

[戸口で隣の女房と話か何かをしていた] かみさんが、夫を見るやその顔色に仰天して中について入って来た。

- [시장 앞에서 노래를 하는] 춘자 남편을 보았다. <첫사랑 /199>

[市場の前で歌を歌っている] チュンジャの夫に会った。

連体節は時間の状況語も内包しうる：

- [어제 전화로 얘기하신] 것 생각해 봤는데요. <군것질/3>
[昨日電話でお話しなされた] こと, 考えてみたんですけど….
- 문자는 [아직도] 청년의 [미적지근한] 체온이 배어있는] 수화기를 집어들었다. <먼그대/12>
ムンジャは, [いまだに] 青年の [生温かい] 体温が³残っている] 受話器を取った.

多くの従属節同様, 連体節は陳述副詞を内包しえない:

- 혹 [내가 처음 사랑을 고백한] 날은 아닐까? <군것질/21>
ひょっとして [俺が初めて愛を告白した] 日じゃないだろうか?
- 어쩌면 [그 삼거리까지 어머니를 배웅나왔던] 할아버지가 내게 그 등을 돌려대어 나를 업었기 때문이었는지도 모른다. <술레/219>
もしかしたら [あの三叉路まで母さんを見送りに出て来ていた] おじいさんが僕に³あの背を差し出して僕を負ぶったからかもしれない.

連体節は自らの内に別の連体節を内包しうる:

- [[인생 다 살아본] 여자처럼 보이는] 건 싫어! <바구니/54>
[[人生を全部生きてしまった] 女のように見える] のなんて, 嫌!

連体節は讓歩節である해도節も内包しうる. この点は, 理由節である하니까節や, 反意節である하지만節, 하는데節などと同様であって, 讓歩節を内包できない様態節や条件節よりは大きい節だと言える:

- [[창밖에 버려져도] 아무도 주워가지 않을] 나이. 원한 살의 생일. <군것질/40>
[[窓の外に捨てられたって] 誰も拾っちゃいけないだろう] 歳. 51歳の誕生日.

5-3. 連体節の主語 -가/-이 (…が)と -의 (…の)

連体節の主語をめぐっては, 今一つ, 日本語文法でいうところの「ガノ可変」に相当する現象が目される. 例えば次のような例は, -의 (…の) を -가/-이 (…が) に言い換えることが可能である:

- 달준씨는 그런 와중에도 가만히 보니 녀석의○○/녀석이○○ 노는 것이 신기하기도 하고 우습기도 했다. <인간/50>

タルチュンさんは、そんな渦中にもよく見ると、奴の／奴がやることが不思議でもあり、おかしくもあった。

- 계집애가 악을 쓰는 울부짖음도, 우리들의○○/우리들이○○ 날뛰는 모습을 보고 달려오며 질러대는 6 동 아주머니의 목소리도, 무슨 일인가 싶어 이쪽을 기웃거리며 걸어오는 수위 아저씨의 말도 들려오지 않았다. <침묵 /266>

女の子が声を張り上げた叫びも、我々の／我々が飛び回る姿を見て、走って来て叫ぶ6棟のおばさんの声も、何かと、こちらを見やりながら歩いて来る守衛のおじさんの声も聞こえて来なかった。

ただし、こうした言い替えは、連体節に主語らしきものを持つ例において、いつでも可能だというわけではなく、現代朝鮮語においてはむしろ例外的に極く限られた数しか現れないことをまず確認しなければならない。次の例のように、-의の名詞の前に更に修飾語が付けば言い替えが不可能で、付かなければ可能だというようなことも起こる：

- 말쑥한 양복 차림의○○/양복 차림이 ○○젊은 남자가 쿵광거리는 발소리도 요란하게 층계를 내려왔다. <오늘의 /44>

こざっぱりしたスーツ姿の○/スーツ姿が×若い男がどンドン鳴る足音もすさまじく階段を降りて来た。

- 양복 차림의○○/양복 차림이○○젊은 남자가 쿵광거리는 발소리도 요란하게 층계를 내려왔다. <오늘의 /44 改変>

스ーツ姿の○/스ーツ姿が○?若い男がどンドン鳴る足音もすさまじく階段を降りて来た。

-의と-가/-이が相互に言い替え可能なこうした現象は、これまでは連体節の主語における交換可能性として認識されて来た。つまり連体節内の主語が交替する次のような構造として把握されていたのである：

- [나의 살던] 고향은 꽃 피는 산골. <이원수/고향의 봄> ○○

[私の住んでいた] 故郷は花咲く山里。

- [내가 살던] 고향은 꽃 피는 산골.○○

[私が住んでいた] 故郷は花咲く山里。

しかしながら朝鮮語においては、-의(…の)を持つ要素は、連体形をとっている用言の主語ではなく、連体形をとった用言と共に被修飾体言を修飾するところの、修飾語として見るべきであろう。-의が可能な、ここで挙げた各例でも、「나의(私の)→고향(故郷)」「녀석의(やつ)→짓

(こと)」「우리들의(我々の) → 모습(姿)」「양복차림의(洋服姿の) → 남자(男)」のように、-의を持つ要素が被修飾体言を直接修飾しうる意味的な関係にあることが、そのことを何よりも物語っている。-의を持つものと、-가/-이 (…が) を持つものとは、構造が全く異なるのである。であるが故に、朝鮮語では、-가/-이を持つ構文を-의を持つ構文に言い替え得ないものの方が多いのだと言わねばなるまい。-의を持つ要素は文字通り属格であって主格ではないのである：

● [나의] [살던] 고향은 ○○

[私の] [住んでいた] 故郷は

● [내가 살던] 고향은 ○○

[私が住んでいた] 故郷は

-의を持つものと-가/-이を持つものは構造が異なることは、-의を持つ要素と連体形をとった用言との間に他の要素が介在しにくいことからわかる：

● [나의 오래 살았던] 고향은 ××

[私の長く住んでいた] 故郷は×△

● [나의 동생과 같이 살던] 고향은 ××

[私の妹と一緒に住んでいた] 故郷は×△

なお、上のような例では、「나의」(私の)のあとに休止(pause)を置けば、文が成立しやすくなる。このことは、「나의」(私の)が後続する「동생과 같이」(妹と一緒に)などの要素から独立した、連体修飾成分(冠形成分)であって、述語「살았던」(住んでいた)に対応する主語ではないことの現れである。

更にまた他の要素が介在する場合には、互いに語順を入替えうることも、「나의」(私の)が主語でないことの傍証となる：

● [오래 살았던] [나의] 고향은 ○○

[長く住んでいた] [私の] 故郷は○

● [동생과 같이 살았던] [나의] 고향은 ○○

[妹と一緒に住んでいた] [私の] 故郷は○

用例によっては、用言を否定形にしてみると、否定のスコープに違いが出て、主語でないことがはっきり確認できる：

- 나의 입은 옷 → 나의 입지 않은 옷 ○○

私の着なかつた服（服は私のもの）

- 내가 입은 옷 → 내가 입지 않은 옷 ○○

私が着なかつた服（服は私のものとは限らない）

更にまた、-의を持つ要素が「나의→고향」のように、被修飾体言を直接修飾しうる関係にあるべきものが、連体形用言を否定にすると崩れて不自然な文になるものがあることも傍証の1つとなろう：

- 나의 사랑하는 여인들 ○ → 나의 사랑하지 않는 여인들 △×

私の愛する女性たち ○ → 私の愛していない女性たち ○△

〈사랑하지 않는 여인들〉 → 〈나의 → × 여인들〉

- 내가 사랑하는 여인들 ○ → 내가 사랑하지 않는 여인들 ○○

私が愛する女性たち ○ → 私が愛していない女性たち ○

〈사랑하지 않는 여인들〉 → 〈나의 → ○ 여인들〉

-의を持つ要素が「나의→고향」のように、被修飾体言を直接修飾しうる関係にあるという条件が成り立たない場合は、朝鮮語では-의は極めて用いにくい。日本語ではこれでも用いられるものがあつて、両言語のこの違いは注目すべきである。朝鮮語の-의よりは日本語の「…の」の方が許容度が高らかに広いと言える。朝鮮語と日本語は、あるいは構造が異なるのかもしれないが、日本語の言語資料の検討が不足しているので、ここでは即断を避けることにしたい：

- 머리의 긴 소녀 × × 〈머리의 → × △ 소녀〉

髪の長い少女 ○ 〈髪 → × △ 少女〉

- 휘파람새의 와서 우는 매화나무. × ×

〈휘파람새의 → × △ 매화나무〉

鶯の来て鳴く梅の木。〈山田孝雄(1936:206)〉 ○ 〈鶯 → △ 梅の木〉

以上述べたことを簡単に要約しよう。(1)朝鮮語において、連体節内の主語のように見える、-의(…の)を持つ要素は、常に被修飾名詞(head noun)を直接修飾しうる意味的な関係にある。(2)連体節内の-가/-이(…が)を持つ主語が、被修飾名詞を直接修飾しうる意味的な関係にない場合は、その-가/-이を-의に言い換えることができない。(3)-의を持つ要素と連体節の述語との間には他の要素が介在しにくい。(4)そうした要素を介在させる場合は、-의の直後に休止(pause)を置くと文が成立しやすくなるが、これも-의を持つ要素と連体節の述語とが「主語→述語」の関係の

ような直接の呼応とは異なるものであることの証左である。(5)他の要素が介在する場合には、-의を持つ要素を被修飾名詞の直前、即ち連体節の外に移動が可能である。(6)連体節の述語を否定にすると否定のスコープに違いが出るものがある。以上のようなことから、歴史的にはともかく、少なくとも現代朝鮮語においては、これまで連体節の主語として把握されてきた、-의を持つ要素は、連体節の主語ではなく、被修飾名詞を直接修飾する修飾語であり、文字どおりの属格であると考えうるのである。

5-4. 形容詞の完成連体形（現在連体形）による連体節構造

「[[主語…述語（形容詞の完成連体形）]主節]」のごとく、形容詞の完成連体形（現在連体形）が主語と呼応している例は、動詞の場合に比べて出現頻度が一般に低い。そして更に形容詞に着目すると、形容詞ごとに主語を伴う比率が異なることがわかる。本稿で調査した資料から、一般に頻度の高い形容詞について見るならば次のとおりである：

【表】基礎資料(1,3889 文)中に現れた主な形容詞の完成連体形とその主語

	意味的な 分類	全用例数	主語なし	主語あり		
				主語あり 小計	-가/-이	ゼロ語尾
같다	状態形容詞	236 例	236 例 100.0%	0 例 0%		
많다	度量形容詞	58 例	32 例 55.2%	26 例 44.8%	12 例	14 例
적다	度量形容詞	4 例	2 例 50.0%	2 例 50.0%		1 例
크다	度量形容詞	118 例	113 例 95.8%	5 例 4.2%	4 例	1 例
작다	度量形容詞	46 例	43 例 93.5%	3 例 6.5%		3 例
다르다	状態形容詞	97 例	96 例 99.0%	1 例 1.0%	1 例	
높다	形態形容詞	21 例	17 例 81.0%	4 例 19.0%	1 例	3 例
낮다	形態形容詞	3 例	3 例 100.0%	0 例 0%		
길다	形態形容詞	20 例	20 例 100.0%	0 例 0%		
짧다	形態形容詞	13 例	10 例 76.9%	3 例 23.1%		
깊다	形態形容詞	16 例	15 例 93.8%	1 例 6.3%		1 例
아름답다	美醜形容詞	8 例	7 例 87.5%	1 例 12.5%	1 例	
예쁘다	美醜形容詞	14 例	14 例 100.0%			
새롭다	状態形容詞	16 例	15 例 93.8%	1 例 6.3%	1 例	
그리하다	評価形容詞	16 例	16 例 100%	0 例 0%		
좋다	評価形容詞	51 例	46 例 90.2%	5 例 9.8%	1 例	4 例

先に述べたように、連体節の主語に基本的に-는/-은は立たない。表では省いたが、上の調査においても連体節の主語に-는/-은を持つものは 1 例もなく、そのことがはっきりと確認できた。主語があるものでは、-가/-이 (…が) のほか、語尾 (助詞) のない、単独形 (不定格、絶

対格)²⁸が用いられることにも注目しておこう。

ところで、「N 1이 좋은 N 2」(N 1が良いN 2)のような、形容詞の完成連体形を述語とする連体節の、主語に立ちうる名詞N 1と、連体節によって修飾される名詞N 2の間には、一定の相関関係があり、語彙的に制限される傾向がある。即ち、N 1はN 2の部分であったり、所属物、あるいは属性であることが極めて多い:

- [N 1이 좋은] N 2 [N 1が良い] N 2
- [部分・属性 形容詞] 全体
- [결이 좋은] 머리 ○○ [髪質が良い] 頭 (髪)
- [머리가 좋은] 학생 ○○ [頭が良い] 学生
- [학생이 좋은] 학교 ○○ [学生が良い] 学校
- [학교가 좋은] 동네 ○○ [学校が良い] 地区

これらは基本的に形容詞を述語とする次のような構造に入りうる名詞である:

- 이 동네는 학교가 좋다. ○○ この地区は学校が良い。

なおN 2が時間名詞²⁹の場合は、とりわけN 1とN 2の関係が相当に柔軟で、「운수 좋은 날」(運の良い日)のようなものもある。

좋다は「나는 학생이 좋다」(私は学生が好きだ)のごとく「主体-対象-形容詞」という、対象に主格語尾を持つ構造を許す形容詞なので次のような連体節もありうる:

- [학생이 좋은] 나 ○○ ただし [내가 좋은] 학생 ○○
- [対象 形容詞] 主体 [主体 形容詞] 対象
- [学生が良い] 私 [私が良い] 学生
- [学生が好きな私] [私が好きな学生]

「품질이 좋은 이유」(品質が良い理由)のように一部の事柄名詞・抽象名詞³⁰の場合はN 1にも上のような関係とも言えない名詞も立ちうるが、これは先に見た名詞句補文の内容節の構造の場合である。

連体節を構成する単語間の意味には様々な相関関係があると思われるが、本稿で見たのは、そのほんの一端に過ぎない。今後はこうした意味上の相関関係についての検討もなされる必要があらう。

6. おわりに

本稿で考察した点を簡単に列挙し、まとめに代えよう。連体形語尾の文法範疇は、法、時制、タクシス、アスペクトのいずれとも単純に決めかねるような、それら諸機能の混交的なところがあるが、大枠だけを見るならば時制と考えてもあながち間違いではない。基本的な連体形については、하는を已然形、한を完成形、할を予期形、하던を経験形と、それぞれ暫定的に名づけておく。時制と見た場合、連体形の時制は主節の時を基準とする相対時制でもなく、発話時を基準とする絶対時制でもない、独立した設定時を持つ、いわば浮いている時制である。単独の形容詞の連体形も連体節である。連体節の主語としては、-가/-이 (…が) が用いられ、-는/-은 (…は) は避けられるが、これは-는/-은 (…は) によつて主題を表わす題目語は連体節内に包摂されないことを示す。ただし対比・対照を表わす-는/-은 (…は) は連体節内にも位置を占めることができる。これらの現象は朝鮮語と日本語がかなりの程度まで並行的である。いわゆる「ガノ可変」に相当する現象は、朝鮮語の方が日本語よりもはるかに制約がきつい。現代朝鮮語の-의 (…の) は、連体節内の主語ではなく、被修飾名詞を修飾する修飾語だと見做しうる。連体節は場所や時間の状況語は内包しうるが、陳述副詞は内包しえない。また連体節は自らのうちに別の連体節を内包しうる。形容詞の連体修飾構造の単語間の意味的な相関関係には一定の傾向を認めることができる。連体修飾構造をめぐる、解決すべき問題は、まだまだ多いといわねばならない。

●参考文献

(1)朝鮮語で書かれた文献

高永根(1989)『國語形態論研究』서울大學校出版部

과학원 언어 문학 연구소 사전 연구실(1962)『조선말 사전』과학원 출판사

과학원 언어 문학 연구소 언어학 연구실(1963)『조선어문법 2』과학원 출판사

권재일(1980)「현대한국어의 관형화내포문 연구」『한글』제 167호. 한글학회

권재일(1985)『국어의 복합문 구성 연구』집문당

권재일(1992)『한국어 통사론』民晉社

김석득(1992)『우리말 형태론』담출판사

김영희(1987)「국어의 접속문」『국어생활』11. 국립국어연구원

김영희(1988)「등위 접속문의 통사 특성」『한글』제 201·202호. 한글학회

남기심(1985)「접속어미와 부사형 어미」『말』10. 연세대학교 한국어학당

남기심·고영근(1985)『표준 국어문법론』담출판사

南基心·高永根·李翊燮編(1975)『現代國語文法』啓明大學校出版部

남기심·루코프(1983)「論理的 形式으로서의 ‘-니까’ 구문과 ‘-어서’ 구문」『국어의 통사·의미론』담출판사

노마(野間秀樹)(1993b)「現代韓國語의 接續形 <-다가>에 대하여-aspect·taxis·用言分類」『朝鮮學報』第 149 輯. 朝鮮學會

노마(野間秀樹)(1993c)「現代韓國語의 對格과 動詞의 統辭論」第 20 回 國語學會 共同研究會 發表要旨

노마(野間秀樹)(1994a)「현대 한국어의 連體形 <하던>과 <했던>에 대하여」PACKS 제 2차 한국학 환대 평양 국제회의 발표요지

노마(野間秀樹)(1996a)「한국어 문장의 계층구조」『언어학』제 19호. 한국언어학회

노마(野間秀樹)(1996b)「현대한국어의 대우법 체계」『말』제 21집. 연세대학교 연세어학원 한국어학당

노마(野間秀樹)(1996c)「1980년대 이후 일본에서의 현대한국어 문법론·어휘론 연구 - 言語事實主義의 전개 -」『韓國文化』18. 서울大學校 韓國文化研究所

무라타(村田寛)(1996b)「<했었다>형의 연구-현대한국어의 시간의 표현-」『제 23회 국어학 공동연구회 발표논문집』

리의도(1996)「매김말의 의미 기능」『우리말 연구 4 우리말 의미 연구』한말연구학회. 박이정

박기덕(1983)「한국어의 관형절에 관한 연구」『言語와 言語學』第 9 輯. 한국의국어대학교 언어연구소

서상규(1983)「부사의 통사적 기능과 부정의 범위」연세대학교 대학원 석사학위논문

서정수(1983a)『국어 구문론 연구』담출판사

서정수(1983b)「{(있)던}에 관하여-시상적 기능을 중심으로-」『국어의 통사·의미론』담출판사

서정수(1988)「「더」는 회상의 기능을 지니는가-종결법과 인용법의 「더」를 중심으로-」『꼭 읽어야 할 국어학 논문집』集文堂

- 서정수(1990)『국어문법의 연구 I · II』 한국문화사
- 서정수(1994)『국어문법』 뿌리깊은나무
- 徐泰龍(1979)「內包와 接續」『國語學』 8. 國語學會
- 성기철(1992)「국어 어순 연구」『한글』 제 218호. 한글학회
- 申昌淳(1984)『國語 文法 研究』 博英社
- 安秉禧(1966:1975)「不定格(Casus Indefinitus)의 定立을 위하여」『東亞文化』 6. (南基心 외 편(1975)에
 收錄)
- 安秉禧·李珣鎬(1990)『中世國語文法論』 學研社
- 양동휘(1978)「국어 관형절의 시제」『한글』 제 162호. 한글학회
- 양인석(1972)「한국어의 접속화」『語學研究』 第 8 卷 第 2 號. 서울大學校 語學研究所 (南基心·高永根·李翊
 燮編(1975)에 收錄)
- 왕문용·민현식(1994)『국어 문법론의 이해』 개문사
- 柳穆相(1985)『連結敘述語尾研究』 集文堂
- 이가라시(五十嵐孔一)(1996b)「『원인·이유』를 나타내는 접속형 ‘-(아/어)서’와 ‘-(으)니까’에 대하여 -
 종속절의 포함구조를 중심으로-」 한국언어학회 겨울학술대회 발표요지
- 李基文(1961:1972)『國語史概說』 塔出版社
- 이은섭(1996)「현대 국어 부정문의 통사 구조」『國語研究』 第 140 號. 國語研究會
- 李翊燮·任洪彬(1983)『國語文法論』 學研社
- 李廷玟(1975)「국어의 補文化에 대하여」『語學研究』 第 11 卷 第 2 號. 서울大學校 語學研究所
- 李弼永(1981)「國語의 關係冠形節에 대한 研究」『國語研究』 第 48 號. 國語研究會
- 李弼永(1990)「關係化」『國語研究 어디까지 왔나 - 主題別國語學研究史』 東亞出版社
- 李賢熙(1990)「補文化」『國語研究 어디까지 왔나 - 主題別國語學研究史』 東亞出版社
- 李賢熙(1994)『中世國語構文研究』 新丘文化社
- 이흥배(1975)「국어의 關係節化에 대하여」『語學研究』 第 11 卷 第 2 號. 서울大學校 語學研究所
- 이흥식(1990)「현대국어 관형절 연구」『國語研究』 第 98 號. 國語研究會
- 이흥식(1996)「국어 문장의 주성분 연구」서울대학교 대학원 문학박사 학위논문
- 이희자(1994)「국어의 ‘주제부/설명부’ 구조 연구」『國語學』 제 24 집. 國語學會
- 任洪彬·張素媛(1995)『國語文法論 I』 韓國放送通信大學校出版部
- 張京姬(1985)『現代國語의 樣態範疇 研究』 塔出版社
- 趙義成(1996)「현대한국어의 단어결합에 대하여」『제 23 회 국어학 공동연구회 발표논문집』 국어학회
- 陳滿理子(1996b)「현대한국어의 ‘-로’격에 대하여 - 單語結合論의 觀點에서 -」『제 23 회 국어학 공동연구회
 발표논문집』 국어학회
- 崔東柱(1995)「國語 時相體系의 通時的 變化에 관한 研究」서울大學校 大學院 文學博士學位論文
- 최윤갑·리세룡·편저(1984)『조선어학사전』 연변인민출판사
- 崔在喜(1991)『국어의 접속문 구성 연구』 탑출판사

최현배(1937:1971)『우리말본』 정음사

허웅(1983)『국어학』 샘문화사

허원욱(1996)「현대 국어의 매김마디 연구」『우리말 연구 3 우리말 통어 연구』 한말연구모임 편. 박이정

홍재성(1987)『현대 한국어 동사구문 연구』 탑출판사

(2)日本語で書かれた文献

五十嵐孔一(1996a)「原因・理由を表す接続形 “-(아)서／-(어)서” と “-(으)니까” について」東京外国語大学卒業論文

伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』第131輯. 朝鮮学会

伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(I)——했다形について」『朝鮮学報』第137輯. 朝鮮学会

井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店

井上和子編(1989)『日本文法小事典』大修館書店

梅田博之(1989)「朝鮮語」『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂

梅田博之・村崎恭子(1982)「現代朝鮮語の文構造」『講座日本語学 10』明治書院

大江孝男(1972)「用言語尾の意味と体系——現代朝鮮語の連用形語尾について」『現代言語学』三省堂

大島資生(1995)「は」と連体修飾構造」益岡隆志他編(1995)収録

奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1989)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂

菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』白水社

菅野裕臣(1982)「複・重文の構成」朝鮮語」『講座日本語学 11』明治書院

菅野裕臣(1986)「朝鮮語のテンスとアスペクト」『学習院大学言語共同研究所紀要』9号. 学習院大学言語共同研究所

菅野裕臣(1986-7)「中級講座」『基礎ハングル』1-12号. 三修社

菅野裕臣(1988;1991)「文法概説」『コスモス朝和辞典』所収

菅野裕臣編訳(1990)『動詞アスペクトについて(I)』調査研究報告 No.29. 学習院大学東洋文化研究所

菅野裕臣編訳(1991)『動詞アスペクトについて(II)』調査研究報告 No.35. 学習院大学東洋文化研究所

菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力(1988;1991²)『コスモス朝和辞典』白水社

金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

工藤真由美(1992)「現代日本語の時間の従属複文」『横浜国立大学紀要』No.39. 横浜国立大学

工藤真由美(1993)「テンスとテンポラリティー」『日本語とアジア諸言語との対照的研究——テンスとアスペクト——』1991-1992年度科学研究費報告書

- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸(1980)「文構造の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集 第1巻 朝鮮語学論文集』平凡社
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 権在淑(1992)「現代朝鮮語の用言の接続形 -ㄴㄷについて」『Lingua』第3号. 上智大学一般外国語
- 権在淑(1994a)「現代朝鮮語の用言の接続形Ⅲ (-아/-어)について」『Lingua』第5号. 上智大学一般外国語
- 権在淑(1994b)「現代朝鮮語の接続形Ⅲ -서について」『朝鮮学報』第152輯. 朝鮮学会
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1982)『言語の構造——理論と分析——意味・統語編』くろしお出版
- 小学館・金星出版社共同編集(油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編)(1993)『朝鮮語辞典』小学館
- 鈴木重幸(1972;1982)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 趙義成(1994)「現代朝鮮語の -에서格について」『朝鮮学報』第150輯. 朝鮮学会
- 鄭玄淑(1996)「現代朝鮮語の接続形하고について <1> —— 意味と用法をめぐって——」第128回朝鮮語研究会発表
要旨
- 陳満理子(1996a)「現代朝鮮語の -로格について——単語結合の観点から——」『朝鮮学報』第160輯. 朝鮮学会
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫(1980)「名詞修飾部の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 寺村秀夫(1982)「日本語における単文、複文認定の問題」『講座日本語学 11』明治書院
- 寺村秀夫(1993)『寺村秀夫論文集 I——日本語文法編——』くろしお出版
- 時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店
- 中右実(1980)「文副詞の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店
- 仁田義雄(1989)「文の構造」『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体(上)』明治書院
- 仁田義雄(1993)「現代語の文法・文法論」『日本語要説』ひつじ書房
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志他編(1995)収録
- 野間秀樹(1988)「〈하겠다〉の研究 ——現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって」『朝鮮学報』第129輯. 朝鮮学
会
- 野間秀樹(1990a)「〈할것이다〉の研究——再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって」『朝鮮学報』第134輯.
朝鮮学会
- 野間秀樹(1990b)「朝鮮語の名詞分類——語彙論・文法論のために」『朝鮮学報』第135輯. 朝鮮学会
- 野間秀樹(1993a)「現代朝鮮語の対格と動詞の統辞論」『言語研究Ⅲ』東京外国語大学語学研究所
- 野間秀樹(1995)「朝鮮語の文の構造について」国立国語研究所公開研究発表会発表要旨
- 野間秀樹(1997)「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語の対照研究 4 日本語と朝鮮語 下巻 研究論文
篇』くろしお出版
- 浜之上幸(1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第138輯. 朝鮮学会
- 浜之上幸(1992a)「現代朝鮮語の [結果相] = 状態パーフェクト——動作パーフェクトとの対比を中心に——」『朝鮮

学報』第142輯．朝鮮学会

浜之上幸(1992b)「アスペクトとテキストの時間的構成について——時間的局所限定性・タクシス性の観点から——」

『朝鮮学報』第144輯．朝鮮学会

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志(1995)「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志他編(1995)収録

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版

益岡隆志・野田尚史・沼田善子編(1995)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

水谷静夫編(1983)『朝倉日本語新講座3 文法と意味Ⅰ』朝倉書店

南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店

南不二男(1991)「現代日本語の従属句についての小調査」『日本語学』12月号．明治書院

南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

村田寛(1996a)「〈렸었다〉形の研究——現代朝鮮語の時間の表現——」第127回朝鮮語研究会発表要旨

森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店

山田小枝(1984)『アスペクト論』三修社

山田孝雄(1936)『日本文学概論』宝文館

吉川武時(1989)『日本語文法入門』アルク

渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房

(3)その他の言語で書かれた文献

北京大学東語系朝鮮語専業・延辺大学朝語系朝鮮語専業合編(1976)『朝鮮語実用語法』商務印書館

車旭升・許東振編著(1986)『朝鮮語実用語法』商務印書館

Akademija nauk SSSR (1982) *Russkaja grammatika*. Tom.2. Moskva: Izdatel'stvo Nauka (菅野裕臣抄訳(1990)『ロシア語文法』東京外国語大学講義資料．未公刊)

Bally, Ch. (1932;1965⁴) *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: Francke (小林英夫訳(1970)『一般言語学とフランス言語学』岩波書店)

Bloomfield, L.(1933) *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston

Bondarko, A.V.(1984) *Funkcional'naja grammatika*. Leningrad: Nauka

Bondarko, A.V.(1991) Translated by I.S.Chulaki. *Functional grammar: A Field Approach*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company

Bybee, J.L.(1985) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company

Comrie, B.(1976) *Aspect*. London: Cambridge University Press

Fillmore, C.J.(1975) *Toward a Modern Theory of Case and Other Articles*. (田中春美・船城道雄訳(1975)『格文法の原理——言語の意味と構造』三省堂)

- Jakobson, R.(1971) *Roman Jakobson Selected Writings*. II. The Hague: Mouton
- Jakobson, R.(1990) Waugh, L.R. and Monville-Burstion, M.(ed.) *On Language*. Cambridge: Harvard University Press
- Jarceva, V.N.(red.)(1990) *Lingvisticheskij enciklopedicheskij slovar'*. Moskva: Sovetskaja enciklopedija
- Jespersen, J.O.H.(1924) *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin
- Jespersen, J.O.H.(1927;1965) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III Syntax(Second Volume). London: George Allen & Unwin
- Kholodovich, A.A.(1954) *Ocherk grammatiki korejskogo jazyka*. Moskva: Izdatel'stvo literatury na inostrannykh jazykakh
- Kuno, S.(1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge: The MIT Press
- Lee, Hyun Bok (1989) *Korean Grammar*. New York: Oxford University Press
- Lukoff, F.(1993) *An Introductory Course in Korean*. Book 1-3. Seoul: Yonsei University Press
- Lyons, J.(1977) *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press
- Martin, S.E.(1992) *A Reference Grammar of Korean*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company
- Maslov, Ju.S.(1978) K osnovanijam sopostavitel'noj aspektologii. *Voprosy sopostavitel'noj aspektologii*. Leningrad (「対照アスペクト論の原理に寄せて」菅野裕臣編訳(1991)所収)
- Mathesius, V. (1936;1964) On Some Problems of the Systematic Analysis of Grammar. In Vachek(1964)
- Palmer, F.R.(1979) *Modality and the English Modals*. London: Longman
- Palmer, F.R.(1986) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press
- Ramstedt, G.J.(1939) *A Korean Grammar*. (= MSFOu 82). Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura
- Shibatani, M.(1990) *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press
- Sohn, Ho-min (1994) *Korean*. London: Routledge
- Vachek, J.(ed.)(1964) *A Prague School Reader in Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press
- Vinogradov, V.V.(1975) O kategorii modal'nosti i modal'nykh slovakh v russkom jazyke. V.V. Vinogradov, *Izbrannye trudy: Issledovanija po russkoj grammatike*. Moskva: Izdatel'stvo Nauka

●用例を収集した基本資料 < > は引用時の略号

- 강석 · 김혜영編(1990)『나의 신혼일기』명서원(手記) <신혼>
- 金承鉦(1986)『김승옥 콩트집 햇볕과 먼지의 놀이터』산하(小説) <햇볕>
- 김영현(1990;1991)「별」『李箱文學賞 受賞作品集 14』文學思想社(小説) <별>
- 金周榮(1992)「惡靈」『巨人을 찾아서』예음(小説) <惡靈>
- 東京外國語大學朝鮮語學科研究室編(1991)『朝鮮語視聽覺教材』東京外國語大學(放送ビデオ script)(이 中「월세신부」「비를 타고 오른 망둥이」「장군 명군」「광주는 말한다」「김치」를 使用) <월세> <망둥이> <장군> <광주> <김치>
- 徐永恩(1983;1985)「먼 그대」『제 7 회 李箱文學賞受賞作品集』文學思想社出版部(小説) <먼그대>
- 宋河春(1987)『호박꽃 여름』고려원(小説) <호박>

- 양귀자(1987)『원미동시인』『원미동 사람들』文學과知性社(小説)〈원미〉
- 양인자(1988)『선비 풍토 문학선 1 비오는 날의 군것질』선비(小説)〈군것질〉
- 吳貞姬(1984:1985)『순례자의 노래』『제 8 회 李箱文學賞受賞作品集』文學思想社出版部(小説)〈순례자〉
- 오혜령(1990)『왜 나를 낳으셨습니까』『나는 누구입니까』文學世界社(戯曲)〈왜〉
- 윤정모(1985)『신발』黃皙暎・金正煥編『우리들의 공동체 하나됨을 위하여 -80년대 대표 소설선 3』지양사(小説)〈신발〉
- 尹興吉(1983:1985)『오늘의 運勢』『제 7 회 李箱文學賞受賞作品集』文學思想社出版部(小説)〈오늘의〉
- 李東河(1989)『果川에는 새가 많다』『三鶴島』東亞(小説)〈果川〉
- 李文烈(1982:1985)『匿名의 섬』『제 6 회 李箱文學賞受賞作品集』文學思想社出版部(小説)〈匿名〉
- 李筍(1985)『병어회-아들 2』黃皙暎・金正煥編『일과 사랑과 우리들의 공동체 -80년대 대표 소설선 2』지양사(小説)〈병어회〉
- 李祭夏(1985:1986)『소렌토에서』『李祭夏小説集 龍』文學과知性社(小説)〈소렌토〉
- 李清俊(1987:1993)『호르는 山』『李箱文學賞 受賞作品集 11』文學思想社(小説)〈山〉
- 林菊姬・禹鍾範編(1984)『마구니에 가득찬 행복 3』文化放送 전예원(手記)〈마구니〉
- 全商國(1982:1985)『술래 눈뜨다』『제 6 회 李箱文學賞受賞作品集』文學思想社出版部(小説)〈술래〉
- 鄭昭盛(1988)『王陵』『뜨거운 江』東亞(小説)〈王陵〉
- 鄭然喜(1988)『막차요, 막차』『뽕』文學思想社(小説)〈막차〉
- 趙星基(1991)『우리 시대의 소설가』『李箱文學賞 수상작품집 15』文學思想社(小説)〈소설가〉
- 趙世熙(1983:1989)『모독』『趙世熙小説集 시간여행』文學과知性社(小説)〈모독〉
- 최해걸(1992)『인간아!』대성(小説)〈인간〉
- 韓水山(1987:1989)『沈默』『겨울숲』도서출판 東亞(小説)〈침묵〉

●基本資料以外の引用資料

- 김중환(1996)『존재의 이유』『김중환』1996.9.17 제작 CD(歌詞)〈존재〉
- 성석제(1996)『첫사랑』『이상문학상 수상작품집 20』문학사상사(小説)〈첫사랑〉
- 윤대녕(1996)『천지간(天地間)』『이상문학상 수상작품집 20』문학사상사(小説)〈천지간〉

註

- ¹ 基本資料選定は,(1)時代限定の原則,(2)場所限定の原則,(3)方言限定の原則,(4)ジャンル(テキスト類型)限定の原則という, 4つの原則に基づく. 詳しくは노마(野間秀樹)(1996a:134)参照.
- ² 協力を仰いだ母語話者は, 神田外語大学専任講師・權在淑先生, ソウル大学講師・高東旻先生, 東京外国語大学客員助教授・李浩權先生, ソウル大学助教・김윤신先生である. 心より感謝を表したい. 念のために基本資料からの引用も高先生, 金先生に検討を仰いだ, 全て自然であるとのことだったので記号は省略した.
- ³ 韓国の一部の学者は「통합(統合)」という術語を, 接辞などが直前の要素に単に結合することの意で用いている

が⁴、本稿でいう統合(integrate)とは、直前の要素のみならず、それ以前に現れた一定の全体に影響を及ぼしつつそれら全体をまとめて統括する働きを指す。

⁴ 노마(野間秀樹)(1996a:137-139)および野間秀樹(1997)参照。形態論的には名詞でありながら統辞論的には用言の機能を果たす一群の単語については野間秀樹(1990b:36-37)参照。

⁵ 主語と述語の問題に関しては노마(野間秀樹)(1996a:137-139)および野間秀樹(1997)参照。

⁶ 朝鮮語の節の認定に関しては노마(野間秀樹)(1996a:139-144)および野間秀樹(1997)参照。

⁷ Parataxis と hypotaxis については亀井孝他(1996:1207-1208)および Jespersen(1927:1965)参照。

⁸ 朝鮮語の種々の節に関する詳細は노마(野間秀樹)(1996a:139-144)および野間秀樹(1997)参照。

⁹ 否定と呼応する単語、即ち negative polarity item を韓国では「부정극어(否定極語)」と呼ぶ。朝鮮語の否定極語については任洪彬・張素媛(1995:432-438)参照。

¹⁰ 接続形-면서で統合されている節を、〈하먼서節〉のように表わすことにする。他の用言の諸形も同様に、〈하다가節〉、〈하먼節〉などと表わす。

¹¹ 朝鮮語の命題(proposition)と法性(modality)、および法(mood)については野間秀樹(1988:9-13)、노마(野間秀樹)(1996a:134-136,158-168)参照。他の言語の modality については Fillmore(1975)、Vinogradov(1975)、Lyons(1977)、Bybee(1985)、Bondarko(1984,1991)、Palmer(1986)、益岡隆志(1991)などを参照。Modality と関連して、日本語の陳述性については、山田孝雄(1936)、時枝誠記(1941)、渡辺実(1971)等を参照。

¹² Dictum と modus については Bally(1932:1965:36)参照。

¹³ 朝鮮語のこうした階層構造については노마(野間秀樹)(1996a)および野間秀樹(1995,1997)参照。朝鮮語の階層構造についての議論は、原因・理由節を扱った五十嵐孔一(1996a)をもって嚆矢とする。また이가라시(五十嵐孔一)(1996b)も参照。

¹⁴ 最も大きな争点は、-는を〈-는+ㄴ〉と、-던을〈-던+ㄴ〉のように2つの形態素に分けるかどうかという点であろう。本稿では2つの形態素に分解する節は採らない。例えば-던을〈-던+ㄴ〉のように分けるのは、終止形の-더라との共通性を求めることに最も大きな契機があろうが、連体形の-던と終止形の-더라とは、その機能の点、用言の分布の点から著しい差があつて、少なくとも共時的な観点からは、無理に共通点を求める必要はない。

¹⁵ 朝鮮語の時制(tense)については、伊藤英人(1989,1990)参照。

¹⁶ Taxis については Jakobson(1971:135-146)、Jarceva(1990:503-504)、浜之上幸(1992:15-82)、野間秀樹(1993b:38-54)参照。

¹⁷ 朝鮮語のアスペクト(aspect)については、浜之上幸(1991,1992ab)参照。

¹⁸ 接尾辞-더-は、これまでの文法論でしばしば目撃法、回想法の名で呼ばれてきた。ここでは노마(野間秀樹)(1996ab)と同様、体験法と呼んでおく。

¹⁹ 양동휘(1978)は、主節時と発話時が異なる時、朝鮮語の連体形の時が主節時と発話時のいずれを基準に解釈されるかを検討し、基本的には主節時基準だとしている。連体形の時がいずれかの時に「必ずそう解釈される」というのではなく、양동휘(1978:206)の「解釈される可能性が大きい」という表現に注目したい。要するに、「決定できない」ことでもあるわけで、そのことの方が重要だと思われる。

²⁰ 李翊燮・任洪彬(1983:270)では次の例を挙げて(a)と(b)、2つの型を説明している。これらの例では日本語に逐語

訳すると、(b)は「という」がなければ、若干自然さに欠けるかもしれない：

● (a) 내가 읽은 책은 재미있더라. 私が読んだ本は面白かったよ。

● (b) 네가 책을 읽은 사실이 놀랍다. お前が本を読んだ（という）事実が驚きだ。

朝鮮語と日本語のこの2種の連体節構造は概ね平行しているが²⁵，こうした微妙な差異はまだほとんど究明されていない。

²⁵ 井上和子(1976)では，この「との」や，「という」は補文標識(COMP)と呼ばれる。なお，李翊燮・任洪彬(1983:271)では complementizer は보문자(補文子)と訳されており，「冠形語尾」では-은と-을だけを認め，-는は「ㄴ+ㄴ」の結合と分析しようとしている。

²² 이홍식(1990)に形容詞の連体形をめぐる議論がある。

²³ 朝鮮語の単語結合(連語)(slovosochetanie)については趙義成(1994,1996)，陳満理子(1996ab)および노마(野間秀樹)(1996a:136-137)参照。ロシア語の単語結合については Akademija nauk SSSR (1982)参照。

²⁴ 文法的な格としての「主格」，文成分としての「主語」，意味的な平面における動作や状態の「主体」，能動的な動作の主体としての「動作者」，伝達論的な平面，即ち発話の平面における「主題」，文法的な人称としての「一人称」，発話の担当者としての「話者」，テキスト生産者としての「作者」は，それぞれ異なった平面における術語として互いに区別する。野間秀樹(1988:67,1990:57)参照。角田太作(1991:165-224)は，意味役割における「動作者」，格における「主格」，情報構造における「主題」，文法機能における「主語」を区別すべきことを論じている。이희자(1994:325-327)はテキスト論的な観点から，「主題」が文の構成成分ではなく，「発話文」(utterance)の構成成分であると論じている。

²⁵ IN-marker と OUT-marker については，노마(野間秀樹)(1996a:165-167)および野間秀樹(1997)参照。「主題 = 叙述」の階層のみならず，文の様々な階層において，大なり小なり，それぞれの IN-marker あるいは OUT-marker の働きをする単語や文法形式があると思われる。当該の階層について，いったいどのようなものが IN-marker あるいは OUT-marker の働きをするか，しないかという問題は，統辞論の今後の大きな研究課題である。

²⁶ 朝鮮語では「ある」と「いる」は共に있다を用いるので，「彼らは」は「いる」を要求するという，語彙的な制限はこの場合係わりがない。

²⁷ <하기>，<함>，<하니까>，<하는> などのような，用言の総合的な形で統合されている節を単一節(single clause)と呼び，<하기 때문>，<하는 것>，<하기 위하여> などのように，更に拡大された構造体からなる節を拡大節(expanded clause)と呼ぶ。노마(野間秀樹)(1996a:143-144)及び野間秀樹(1997)参照。

²⁸ 単独形の術語は曲用形に対するものとして李基文(1972:152-153)が用いている。格としての不定格については安秉禧(1966;1975)参照。

²⁹ 不可算名詞のうち，格語尾の-부터がつきうるものを時間名詞とする。語彙的な意味では時間的な幅を表わす単語群である。野間秀樹(1990b:24-26)参照。

³⁰ 事柄名詞，抽象名詞については野間秀樹(1990b:21-23,28-30)参照。

The Structure of the Adnominal Clause in Korean and Japanese

NOMA Hideki

The purpose of the present paper is to describe the various structural characteristics of the adnominal clause in Modern Korean in reference to the same construction in Japanese.

To begin with, the grammatical category of the adnominal form can not be identified as having specific mood, tense, taxis, or aspect, but rather combines all these grammatical characteristics. However, the characteristic of time becomes very influential and can be said to dominate the grammar of the construction. For this reason, the author establishes a provisional terminology calling *hanun* the "present-form," *han* the "completion-form," *hal* the "anticipation-form," and *haten* the "experience-form." In terms of time, the adnominal form is neither a relative tense that takes as its standard the time of the main clause nor an absolute tense that takes point of utterance as its standard, but rather possesses an independently determined time standard, a hypothesis point, making it a floating tense.

Adnominals of simple adjectives are also adnominal clauses. The subject of the clause does not use the particles *kai/-i* (...*ga* in Japanese) or *nun/-un* (...*wa*), meaning that the topic word is not included within an adnominal clause; however, *nun/-un* (...*wa*) expressing comparison or contrast may be included. These phenomena parallel both Korean and Japanese to a fairly consistent extent.

Although substituting *kai/-i* (...*ga*) and *-uy* (...*no*) is more constrained in Korean than in Japanese, *-uy* does not modify the subject in the adnominal clause, but should rather be viewed as a modifier of the head noun.

Adnominal clauses may include adverbials of time and space, but not modal adverbs. Moreover, another adnominal phrase may also be included.

We can also identify a given tendency within the semantic interrelationships between the words in the adjective's adnominal clause construction.